

第七章・スワットの門

マラカンド峠は、山々に囲まれて東西に走る長く広いスワット溪谷へと続いている。六マイル東のチャクダラで谷は二つに分岐している。一つは北方向のウチに向かって伸び、再び西に曲がると最終的にパンジコラ川に行き当たり、その向こうはナワガイの大溪谷である。これの支流に沿って少し行くとチトラルへの道となる。これに沿って現在マラカンド野戦軍はモーマンドに向かって前進しようとしている。もう一方の支流は谷を東に延長している。チャクダラの数マイル先で南の山々から突き出た長い支脈が谷を塞いでいる。その基部の周りに川の流れが切れ込んでいる。街道は川と支脈の間の狭い石の土手道を通っている。ここがランダカイ、または何世紀にもわたって部族民がそれを「スワットの門」と呼んできた地点である。この門の向こうは上スワットであり、古来の美しく神秘的な「ウディアナ」である。この章では門の突破と谷の頂きへの遠征について記述する。

マラカンドとチャクダラでの激しい戦いは、イギリス人に対して蜂起した山岳民族の連携がどれほど恐るべきものであるかを示していた。最も遠い孤立した谷、最も離れた村々さえもが異教徒の打倒に参加するために武装した男たちを送り出した。すべてのバジャウル族はその敵対度によってランク分けされた。ブナヴァル族とウトマン・ケル族は男を上げた。マッド・ファキールに従う男たちは最大で二―三〇〇人と推定されていたが、現在には武装した二二〇〇人以上であることが分かっていた。軍事のおよび政治的狀況が深刻な様相を呈してきたため、第三予備旅団を次のように構成して動員することが決定された。

第三旅団

指揮―J・H・ウォードハウス准将、バス勲章コンパニオン、聖マイケル・聖

ジョージ勲章

- 第二大隊 ハイランド軽歩兵隊
- 第一大隊 ゴードン・ハイランダーズ
- 第二一パンジャブ歩兵隊
- 第二大隊 第一グルカ隊
- 第三中隊 ボンベイ工兵隊
- 第一四英国野戦病院
- 第四五現地野戦病院
- 第一野戦医療兵站部

二週間前の戦いは、かつての晴れやかな風景に重大で恐ろしい爪痕を残していた。稲穂は四方八方に踏みじられていた。燃やされた村の廃墟は遠くからインクの上のしみのように

見えた。敵が受けた恐るべき損失は戦闘員ではなく、住民のかなりの減少をもたらした。マラカンド基地への攻撃で約七〇〇人の部族民が死亡した。開放空間が近代兵器とマキシム機関銃の使用機会をもたらしたチャクダラの包囲戦では二〇〇人以上が死亡し負傷した。その遺体は何日もその地域に散らばっていた。立っている稲穂、村の廃墟、そして岩の間に、燃え盛る太陽の下にただれた体が横たわり、恐ろしい臭いで谷を満たした。これらを貪り食うために膨大な数のハゲタカがにわかに集まり、私が以前の章で言及した、死体を襲うために穴や隅から出てきた不愉快なトカゲとともに豊富な獲物を奪い合った。品位と健康に関するあらゆる動機が活力を取り戻した勝者に対して敵の遺体の埋葬を促したが、それはこの任務が達成されるほんの数日前のことであった。しかし、そのときですら道を外れた場所には埋葬部隊の手を逃れた相当な数の遺体が残っていた。

一方、スワット渓谷の部族民が受けた罰とその大きな損失は、多くの人々の意気を消沈させ、降伏するために数人の代表団が来た。下スワット族は無条件に降伏し、彼らの村に戻ることを許された。この許可を利用して彼らが自らの荒廃した家を動き回り、損害を修復しようとするのが見られた。他の者たちは道端に座り、彼らの谷に軍隊が着実に集積していくのを不機嫌に失望して見ていたが、それはただ単に彼らが武力に訴えた結果であった。

おそらくマラカンドを攻撃した部族民は半ばそこにいた兵士をサーカーの唯一の軍隊と想っていた、と言っても過言ではない。「やつらを殺せ」と彼らは言った、「それですべて終わりだ。」彼らは電信線がはるか遠いインド南部から呼び寄せる連隊について何を知っていただろうか？彼らは世界をざわつかせたことに気が付かなかった／軍の将校がイギリスから七〇〇マイルの海と陸を急行して山間のキャンプへ来たこと／長い列車が遠くの倉庫から弾薬、資材、補給を前線に運んでいたこと／賢明な投資家が彼らの行動が金銀比価にどの程度の影響を与えたかを検討していたこと／あるいは聡明な政治家がスワットの蜂起が差し迫った補欠選挙にどのように影響する可能性があるのか思案していたことを。これらの無知な部族民には、その広大で複雑なシステムのすべての部分が最も軽微な接触にさえも震え、揺れる現代文明の鋭敏さなど思いもよらなかった。

彼らはマラカンド峠の砦とキャンプと、川にかかる揺れる橋だけを見ていた。

マッド・ムラーに見捨てられ、二個旅団に立ち向かった下スワットの人々は完全に打ち負かされ征服されたが、上スワット族は彼らの聖職者に励まされ、彼らの「門」の後ろで安全であると信じ、はるかに独立した空気の中にいた。彼らは政府がどのような協約を提示するかを尋ねるために使者を送り、その問題を検討すると言った。彼らの反抗的態度は、政務官をしてサーカーの決意と力を印象づけるために彼らの地域への軍隊の派遣を勸

告させることとなった。

それに応じて上スワット溪谷への遠征が裁可され、ビンドン・ブラッド卿は前進に必要な準備を始めた。さらなる戦闘の見通しは軍団、とりわけチャクダラの救援に間に合わず、これまで長く埃っぽい行軍しかしてない面々によって熱心に歓迎された。どの部隊が選ばれるかに関して多くの憶測と興奮があり、誰もが自分の連隊が必ず行く／自分たちの番である／そしてもし連れて行かれなかったなら大きな恥となるであろう、と主張した。

しかし、ビンドン・ブラッド卿はすでに決意していた。彼は前進する可能性を考えてアマンダラにかなりの兵力を集中しており、行動が裁可されるとすぐに次のように隊を組織した…

第一旅団

指揮ーメイクレジョン准将

王立西ケント連隊。

第二四パンジャブ歩兵隊

第三一パンジャブ歩兵隊

第四五シーク隊

以下の分隊とともに…

第一〇野戦砲兵中隊

第七英国山岳砲兵中隊

第八ベンガル山岳砲兵中隊

第五中隊マドラス工兵隊

二個戦隊 ガイド騎兵隊

四個戦隊 第一一ベンガル槍騎兵隊

この部隊の戦力は三五〇〇のライフルとサーベル、一八門の砲にのぼった。一二日分の物資が運ばれ、兵士は「八〇ポンド規模」の装備で進んだ。つまり、テントその他の快適さと利便さはなかった。

部隊が出発する前に、悲しい出来事が起こった。八月一二日に、七月二六日の夜に負傷したJ・ラム中佐が死亡した。早期に切断手術をしていたらその命は救われていたかもしれない／しかし、これはレントゲン検査によって弾丸の摘出が可能になることを期待して延期されたのであった。機械は少し遅れてインドから到着した。それはマラカンドに到達するとすぐに試みられた。しかし来る途中で機械が損傷していたことが判明し、何の結果

も得られなかった。その間に壊死が始まり、切断手術に耐えられないほど弱っていた勇敢な軍人は日曜日とその影響で死亡した。彼の大腿骨は弾丸によって完全に粉碎されていた。彼はアフガニスタンとゾブ渓谷で勤務し、デイスパッチにおいて二度言及されている。

一四日にはビンドン・ブラッド卿が特別部隊に加わり、一六日には谷を数マイル上ったタナに移動した。同時に彼はウォードハウス准将にブナーの南の峠の方向に小さな隊を分遣するよう命じた。ハイランド軽歩兵隊、第三中隊ボンベイ工兵隊、および第一〇ベンガル槍騎兵隊の一個戦隊は、それに応じて第三旅団があったマルダンからラストムまで進軍した。この動きにより彼らはブナヴァル族を脅し、上スワット渓谷から注意をそらせた。このようにして敵の力を弱めたビンドン・ブラッドは「スワットの門」を突破するために進んだ。

一六日の夕方、ピートソン少佐指揮下の第一一ベンガル槍騎兵隊による偵察によって、ランタカイの陣地が敵によって強く守備されているという事実が明らかになった。多くの旗が誇示され、騎兵隊が近づくと前線の全体から銃弾が発射された。戦隊はすぐに退却し、状況を報告した。将軍は夜明けに攻撃することにした。

一七日の午前六時三〇分に騎兵隊は移動し、すぐにジャララと呼ばれる村の近くのある仏教遺跡で部族民と出会った。小競り合いが続いた。その間、歩兵隊が近づいていた。敵の主な陣地が明らかになった。ランタカイの支脈の稜線に沿って、空を暗く縁取る旗印が見られた。その下で部族民の剣の刃が日の光に輝いていた。石の胸壁の長い列が尾根を冠し、その後ろには敵が密集していた。五〇〇〇人以上がいたと推定されている。

これがどんな強い陣地であったかを理解することは難しくない。軍の左側には手に負えない川があった。その右側は急峻な山であった。手前には敵に保持されている長い尾根があった。谷を抜ける唯一の道は、尾根と川の間の手道であった。さらに前進するには、敵を尾根から追い出す必要があった。ビンドン・ブラッド卿は前方へ騎行して土地を偵察し、配置を決めた。

正面攻撃で陣地を占領するには、大きな損失が伴う。敵は手強く配置されているので部隊が前進しようとするなら激しい銃火にさらされるであろう。一方、尾根が一度捕捉されれば、部族民の駆除は保証される。そこは良い陣地なのは彼らがそれを保持している間だけである。敗北の瞬間は破滅の瞬間となる。理由は以下のとおりである。尾根の背後を占めるのは沼のような水田であり、敵は非常にゆっくりとしか退却できない。彼らの安全な退却路は支脈の上から丘の主稜線へと続いていた。つまり彼らはその前線の延長によって退却路を形成していた。もちろん、これは戦術的に人々が入り込む最悪の状況の一つであ

る。

尾根の背後にある土地がどのようなものかを知っていたピンドン・ブラッド卿は直ちに現状を認識し、それに応じて計画を立てた。彼は敵の左翼を攻撃することを決意した。これによって敵の側面に回り込むだけでなく、適切な退却路を断ち切るのである。一度味方の軍勢が長い尾根から主要な丘へ続く地点を確保したなら、尾根に残っているすべての部族民は捕えられるであろう。それゆえ彼は次のように命令を出した……

王立西ケント隊は前面を偽装し、敵の注意を引くこと。歩兵の残り、すなわち第二四、第三一パンジャブ歩兵隊、第四五シーク隊は丘を右方向に登り、尾根の頭に側面攻撃を仕掛けること。騎兵隊は敵が見渡していた尾根から追い出されるやいなや――工兵中隊が修理のために配置されている――土手道を通って前方に突進し、田んぼを横切つてその先の開けた土地へ敵を追撃する準備をすること。強力な砲兵隊の全てが直ちに行動を開始すること。

そして軍は前進した。王立西ケント隊は主要陣地に先立つ小さな支脈で仏教遺跡から敵の一部を追い払うことによって戦いを始めた。大砲がタナ村近くの狭い道路で動けなくなる可能性があったため、第一〇野戦中隊は後方に残されていた。しかし、それは無事に到着し、今や急ぎ足となり、午前八時五〇分に敵の陣地とその強力に占領している石の砦に砲火を開いた。数分後、第七山岳砲兵中隊は王立西ケント隊が奪取した支脈で戦闘を開始した。このように大砲の重砲火が攻撃の準備を整えた。野戦砲の大きな砲弾は、それまで一二ポンドの破裂弾の爆発を見たことのない部族民を驚かせた。二個山岳砲兵中隊がさらに彼らを狼狽させた。最初の一五分の砲撃の間に多くが逃げ去った。残りはすべて反対斜面と胸壁の後ろに隠れた。

その間、側面攻撃が進行していた。マイクレジョン將軍と歩兵隊は急な丘の斜面を登り、尾根と主要な丘の接合地点に向かって着実に移動していた。ついに支脈の上の部族民は彼らを脅かす危険を感じた。彼らは退却路をはっきり意識した。彼らは白い軍隊が土手道に沿って強行突破を試みることを想定して尾根の下端にかなりの数の予備兵力を配置していた。彼らは皆、孤立の大きな危険にさらされていることに気づいた。彼らは半島にいて、兵士たちは地峡を確保していた。因つて彼らは、最初は側面攻撃に交戦する意図で尾根沿いに左に移動したが、その後破裂弾の砲撃が激しくなり、小銃射撃が増したため、ただ退却を望むようになった。山岳民族が丘を移動する速度は非常に速かったため、ほとんどの敵は側面攻撃によって孤立する前に逃げるのができた。しかし逃げる際に射殺されたり、大砲の砲火で殺されたりした者も多かった。数人の勇敢な男たちが第三一パンジャブ歩兵隊に突撃したがすべて倒された。

ピンドン・ブラッド卿は敵が総崩れになったのを見て、王立西ケント隊にほぼ無人となった尾根の正面に向かって前進しよう命じた。イギリスの歩兵隊は急いで急勾配の丘に登り、石の胸壁を奪取した。この陣地から彼らは側面攻撃との連絡を確立し、全軍は長距離射撃で逃げる部族民を追撃した。

「スワットの門」はこじ開けられた。軍が土手道に沿って前進できるようになった。しかし、これはさまざまな場所で敵によって破壊されていた。工兵隊は急いでそれを修復した。これが行われている間、騎兵隊は好機が向こうの平原にあることを知っていたので狂的焦燥の中で待たなければならなかった。道路が十分に修復されて一列が通過できるようになるとすぐに彼らは先を争って通過し、土手道の反対側に二―三騎ずつ現れた。

いま事件が起こった。それは素晴らしい勇気ある行動の機会をもたらしたが、それでも不必要な生命の損失を伴ったので悲惨なものと呼ばなければならぬ。騎兵隊が荒れた路面を通過すると、先頭の騎手たちは約一マイルの距離で部族民が丘に向かって素早く走っているのを見た。追跡の興奮に夢中になり、抵抗がわずかであったために彼らは敵を侮り、丘に到達する前に敵を捕まえることを意図して勢いよく前進した。

アダムズ中佐は平野に入るとすぐに、墓地近くの小さな木立を奪取することができれば、退却する部族民に効果的な下馬銃撃を加えることができると考えた。そこで、彼はできるだけ多くの兵士を集め、マクリーン中尉とタイムズ特派員であるフィンキャツスル卿と一緒にその地点へ向けて騎行した。一方、先頭の戦隊を指揮するパーマー大尉と、インドのタイムズの戦争特派員を務めるランカシャー・フュージャリアー連隊（*火打ち石銃兵隊）のグリーンブス中尉は敵を追って田んぼを全速力で騎行した。戦隊は追いつくことができず、湿った土地でだらだらと長い列になった。

丘のふもとでは地面がより硬く、これに達すると、二人の将校は無謀にも敵の中に突入した。この精神によって帝国は多くの命を失ったのであるが、多くの戦いではそれを得たのである。しかし戦いというよりむしろ策略に負けた部族民は、猛然と追跡者に振り向いた。尾根上の部隊はすべてを目撃していた。パーマー大尉は旗の持ち主を切り伏せた。別の男が彼を攻撃した。鮮烈な打撃が大尉の腕を跳ね上げた。弾丸が手首を粉砕したのである。別の男が馬を殺した。グリーンブス中尉は身体を撃たれると同時に地面に落ちた。敵は周りを囲み、横たわった彼を剣で叩き切り始めた。パーマー大尉はリボルバーを抜こうとした。この時、二人のスワールが沼のような田んぼを抜け出して直ちに全速力を出し、叫び声を上げながら救助に来た。そして部族民を切りつけ、滅多切りにした。彼らは皆バラバラに切られるか撃ち倒された。丘の斜面は敵で覆われていた。負傷した将校たちはその

ふもとに横たわっていた。彼らは囲まれていた。これを見てアダムズ中佐とフィンキャツスル卿、マクリーン中尉と二、三人のスワールが支援に駆けつけた。彼らの突撃によって部族民は少し後退し、激しい銃火を浴びせてきた。たちまちフィンキャツスル卿の馬が撃たれ、彼は地面に落ちた。彼は立ち上がり、傷ついたグリーンブスをアダムズ中佐の鞍に持ち上げようと努力したが、この瞬間に第二弾がその不運な将校に当たり、グリーンブス中尉は即死した。支援している間にアダムズ中佐は軽度、マクリーン中尉は致命的に負傷し、二頭を除くすべての馬が撃たれた。ひどい銃火にもかかわらずグリーンブス中尉の遺体と他の二人の負傷した将校は救助され、小さな木立に運ばれた。

生き残った将校であるアダムズ中佐とフィンキャツスル卿の両方がこの勇敢な偉業のためにビクトリア十字章に推薦され、それを受け取った。またマクリーン中尉が生きていればそれを受け取るようになっていた、と公式に発表された。多くの人々が、思いがけない死によって勇気の報酬が妨げられることは許されるべきではないと思った。そして彼が素晴らしい兵士であり、良きスポーツマンとして知られていた辺境では特にそうであった。

フィンキャツスル卿とグリーンブス中尉にふりかかった極端な運命は、ちょっとした考察に値するかも知れない。どちらの将校も軍に正式に雇用されていなかった。どちらも自費で旅をし、戦争の何らかを見るためにすべての障害を回避し、克服する努力をしていた。剣とペンの騎士、彼らには率いるべき軍勢、行うべき任務、自らの行為を報告するべき注意深い指揮官はなく、自らの命以外に差し出すものは何もなかった。彼らは高い賭け金を支払った。そして戦場以外ではそこまで気まぐれではない運命の女神は、一方には王の最大の贈り物とも言われる兵士が望みうる限り最大の名誉を、そして他方には死を払い戻した。

敵の敗走でランダカイでの戦闘は終了した。こうして数時間でほとんど損失なく、部族民が難攻不落と見なしていた「スワットの門」はこじ開けられた。ガイド騎兵隊の一つの戦隊はブラジャ・クレア大尉の下で敵を追撃してアプエ村の近くで小競り合いに勝利し、夕方六時半頃にキャンブに戻った。「この士官はこの事件での手腕と判断によってデイスパッチに言及された／しかし彼は辺境では一ヶ月後のハモンド將軍の命によるママニへの見事な偵察でより有名である。多大な損害を被りながらも最も価値ある情報の入手に成功したのである。」戦いの最中、約二〇〇〇人の部族民が輸送隊を脅かした、しかし、これは元氣のない連中であつた。第一ベンガル槍騎兵隊の二個戦隊との短い小競り合いの末、二〇人の死傷者を出して退却したのである。その日の総死傷者数は次のとおり……

イギリス軍將校

死亡—R. T. グリーンブス中尉、ランカシャー・フュージリアー連隊

— H. L. S. マクリーン中尉、ガイド隊

重傷— M. E. パーマー中尉、ガイド隊

軽傷— R. B. アダムズ中佐、ガイド隊

現地兵— 負傷— 五

その他— 負傷— 二

総犠牲者— 一一

将校の死をもたらし、ビンドン・ブラッド卿が公式デイスパッチで「不幸な出来事」と記述した事件さえなかったならば、総犠牲者が七人に過ぎなかったことを覚えておく必要がある。非常に強い陣地がほとんど損失なく捕捉できたのは、第一に將軍の作戦計画によるものであり／そして第二に、彼が集中させた大砲の力による。一〇月二〇日にダルガイの基地を急襲する最初の企てによってダーセットシャー連隊は深刻な損失を被ったのであるが、その前に大砲の砲撃で揺さぶられたことは、ランダカイの戦闘を目撃していた人々の間に多くの反省を引き起こした。

翌一八日朝、部隊は上スワットの谷を上って進軍を続けた。現地人はすっかり怯えており、もはや抵抗することはなく、平和を求めた。ランダカイでの彼らの損失は五〇〇人を超えていたことが確認された。彼らは正規軍がその強力な武器を使用できるようになったなら対抗するチャンスがないことを知った。

軍が肥沃で美しい溪谷を進むと、すべての兵士は多数の仏教遺跡に感銘を受けた。かつてここには繁栄した都市と文明化された人々がいたのである。ここは法頭「仏教王国の歴史 ジェームス・レツジ、文学修士、法学博士翻訳」によれば、「計五〇〇のサンガラマ」、いわば修道院であった。これらの修道院ではもてなしの法が実行されていた。「見知らぬビクシユ（托鉢僧）がそのうちの一つに到着すると、彼らの望みは三日間叶えられ、その後自ら寝る場所を探すように言われる。」これらはすべて時とともに変化した。その都市は今や廢墟にすぎない。文明的で穏やかな様子の仏教徒に野蛮人が取って代わった。主人はもてなしを求める旅行者をそれ以上彼と関わる面倒を避けるためにさっさと「寝る場所（墓場）」へと案内する。

「言い伝えがある。」と、その歴史の最も暗い時代に地球の最も荒れた国々を旅した勇敢な僧は続ける。「ブッダが北インドに来たとき、彼はこの地に来て、見る人によって長くも短くも見える足跡を残した。」博識の法頭は「それは今も存在し、それについては現在でも同じことが真実である。」と断言しているが、様々な騎兵隊の偵察はそれを発見できず、残念ながら私たちはまたもそれが時間の潮流によって消し去られたと結論しなければならぬ。ここでも、この仏教徒のペデケル（*当時の人気旅行ガイドの名前）は、「彼が衣を乾

かし／邪悪なドラゴン（ナガ）を改宗させた場所」の岩を見るべきだと言う。「それは一四腕尺（*キュビット四五〜五六cm）の高さで二〇腕尺以上の幅があり、その一面は滑らかであった。」これは良く信じられているのであろう／しかし、どれが竜が悔い改めブツダが衣を乾かした現場なのかを兵士たちが確かめるには、あらゆる大きさの岩の数が多すぎた。

その仲間はジェラバード、またはその地域の都市に向かって進んだが、法頭は「公園」の緑と肥沃な美しさに魅了され、快適な谷に残り、「夏は静養していた。」それから彼はソフートの地に降りた。それはおそらくブナーである。

経済的と思われないような何ものも好まれない、この忙しく、実用的、無味乾燥な現代においてさえ、しばし過去のベールを上げ、かつてそうあったであろう世界を垣間見ることは無駄なことではない。キリスト教紀元の五世紀は、人類の歴史の中で最も憂鬱で陰気な時期の一つであった。大ローマ帝国はゴシックのアラリック、フンのアッティラ、ヴァンダルのゲンセリックといった打撃の前に崩壊してしまった。古典の時代の芸術と武勇は、ヨーロッパを水没させた野蛮の大洪水に沈んだ。キリスト教徒はアリウス主義の論争によって激しく揺れていた。守らなければならなかったその純粹な宗教は、迫害の血で汚され、迷信の恐怖によって墮落させられた。これらすべてが西側諸国を苦しめ、人類の衰退または滅亡の予兆のように見えたとき、現在ローマを略奪した者よりも凶暴な野蛮人に支配されている北インドの荒々しい山々にはニルヴァーナという言葉で表現される穏やかな入滅の達成にその人生を捧げた／穏やかで、繁栄した、勤勉で知的な人々がいた。私たちは時間をもたらし大変革を振り返り、学びと進歩の中心地が年月とともにどのように変化したかを観察するとき、おそらく悲しい結論、文明の太陽が直ちに全世界を照らすことは決してできないという結論に至ることは不可避である。

一九日に部隊はミンガオラに到着し、五日間快適なキャンプで待った。ここでデイーン少佐が各部族の降伏を受けるためであった。彼らは敗北によって非常に謙虚になり、穀物と飼料を供給することで軍隊の機嫌をとろうとした。停止中に八〇〇を超えるさまざまなタイプの武器が引き渡された。ミンガオラに到着した夜キャンプに数発の銃撃あったが、村人たちは罰せられることを恐れて「狙撃者」を追い払った。二二日に、コトケ峠までの偵察が土地の性質に関する多くの価値ある情報をもたらした。全員がその景色の美しさに感銘を受けていた。二四日に部隊がバリコットに戻る時、彼らはヒマラヤの輝く雪の頂きが空の青と水田の緑を隔てている美しい谷の思い出を持ち帰った。

軍隊がバリコットで休憩している間、ピンドン・ブラッド卿は個人的にスワット溪谷からブナヴァル族の地へと続くカラカル峠を偵察した。ブナヴァル族はユサフサイ族のユ

サブ部門に属する。彼らは好戦的で乱暴な人々である。インド反乱の鎮圧の後、反乱に加わったセポイと現地人將校の多くが避難するためその谷に逃げてきた。ここで彼らは半ば力によって、半ば説得によってその地位を確立した。彼らは土地の女性と結婚して定住した。一八六三年、ブナヴァル族はイギリス政府と衝突し、歴史上アンベイラ戦役として知られる激しい戦闘が続いた。インドからの難民は再び熱心に白い軍隊を批判し、そしてその並外れた勇氣と凶暴さによって、「ヒンドウスタンの狂信者」と名付けられた。三十六人の將校と八〇〇人の兵士を犠牲にしてブナーは鎮圧された。ついに第一〇一フュージャリア隊が「岩山の哨兵線」を奪取し、作戦の終わりまで保持した。多大な費用をかけてインドからやってきたゾウが作物を踏みつけた。「ヒンドウスタンの狂信者」のほとんどは戦闘で死んだ。ブナヴァル族は政府の協約を受け入れ、軍隊は撤退した。それ以来、一八六八年、一八七七年、一八八四年に彼らは境界の村々を襲撃したが、遠征の脅しによって罰金を支払わされ、損害を回復させられた。一八六三年の強い抵抗以来彼らがつてきた評判は、彼らが辺境部族の間で指導的地位を獲得することを可能にした／そして彼らはこれに乗じてイギリスに対するいくつかの暴動を扇動し、荒立ててきた。マラカンドとチャクダラの襲撃者の中に黒と濃紺の服装をした彼らを見分けることができた。彼らは今、元の谷に撤退し、そこから政府に反抗してすべての協約を拒否した。

ピンドン・ブラッド卿とその護衛が峠の頂上に近づいたとき、その見張りが数発の銃弾を発射したが、抵抗はなかった。すべてのブナヴァル族はその地の南の入り口を守るために急行していた。ラストムのウオードハウス准将の軍隊に攻撃される危険があると考えたのである。將軍はコタルに到着し、足下の谷全体を見た。大きな村々が平野に点在し、肥沃で繁栄した景観を呈していた。

無防備なカラカール峠は軍隊が通行可能であり、政府が同意した場合二週間以内に難なく、ほとんど戦うことなくブナーを征圧することができる。

この件についてインドに電報が打たれ、大いに遅延して躊躇った後、総督は戦勝者である將軍の勧告に反対した。ブナヴァル族と決着をつけるのが望ましいことは完全に認められたが、政府はリスクに尻込みした。従ってマラカンド野戦軍は二週間近く休眠状態にあった。インド政府がブナーを攻撃することを恐れているというニュースが、辺境に山火事のように広がり、部族民の意気を復活させた。彼らは弱さの兆候を見つけたと思った。それがまったく間違っているわけでもなかった。しかしその弱さは物理的というよりも道徳的なものであった。

ブナーの処罰は延期されているだけであり、数か月後には完結する可能性があると主張されている。「二八九七年記」しかし峠を強行突破することなくその土地へ入る機会は二度

とないかもしれない。

八月二十六日、部隊はタナに戻り、上スワットへの遠征は終了した。

「以下は七月二十六日から八月一七日までのスワット渓谷での戦闘で命を落とした部族民の最も信頼できる推定値である。数字には負傷してその後死亡した者が含まれており、戦闘中に即死した者の二倍以上である。」

一. 下スワット	パシヤン人	:	七〇〇	墓地に埋葬
二. 上スワット	パシヤン人	:	六〇〇	墓地に埋葬
三. ブナー固有		:	五〇〇	墓地に埋葬
四. ウトマンケル		:	八〇	
五. ユサフザイ		:	五〇	
六. その他の部族		:	一五〇	
			合計—二〇八〇	

一、二、三は現場での最近の調査の結果である。

四、五、六は現地情報に基づく推定値である。

部族民には外科的または内科的知識がほとんどなく、援助の申し出をすべて拒否したため、負傷者に対する戦死者と戦傷死者の割合が非常に高くなったのであろう。負傷者数と回復者数が等しいと仮定すると、合計損失は約四〇〇〇となる。これらの数値を各戦闘の個別の推定値と比較することにより、照合することができる。

マラカンド	:	七〇〇
チャクダラの包囲	:	二〇〇〇
チャクダラの救援	:	五〇〇
ランダカイの戦闘	:	五〇〇
合計—三七〇〇		